

umbilicalis (L.) KÜTZ. Nature, 164, p. 748. DREW, K. M. & RICHARDS, K. S., 1953: Studies in the Bangioideae, II. The *Conchocelis*-phase of *Porphyra* sp. in *Pollicipes cornucopia* Leach at Roscoff. Journ. Linn. Soc., 55, p. 84. DREW, K. M. 1954: Studies in the Bangioideae. III. The Life-history of *Porphyra umbilicalis* (L.) KÜTZ. var. *laciniata* (LIGHTF.) J. AG. Ann. Bot., N. S., 18, p. 183. GRAVES, J. M., 1955: Life-cycle of *Porphyra capensis* KÜTZ. Nature. 175, p. 393. HOLLENBERG, G. J., 1958: Culture studies of marine algae. III. *Porphyra perforata*. Amer. Jour. Bot., 45, p. 653. 黒木宗尙, 1953: アマノリ類の生活史の研究. I. 果胞子の発芽と生長. 東北水研報告. 2, p. 67. KYLIN, H., 1944: Die Rhodophyceen der schwedischen Westküste. Lunds. Univ. Arsskrift N. F., 2, 40, p. 29. PRINTZ, H., 1926: Algenvegetation des Trondhjemsfjordes. Skrift. utg. af D. Norsk. Vid.-Akad. I. Mat.-nat., 5, pp. 54, 257. ROSENVINGE, L. K., 1910: On the Marine Algae from North-East Greenland. Meddelelser om Grønland. 43, p. 111. ROSENVINGE, L. K., 1931: The Marine Algae of Denmark, Pt. 4, Rhodophyceae 4. Dansk. Vidensk. Selsk. Skrift. VII, Mat.-nat. Afd., 7. p. 618. TAYLOR, W. R., 1937, 1957: Marine Algae of the North-Eastern Coast of North America. Univ. Michigan Studies, Sci. Ser., 13. pp. 206, 215. TSENG, C. K. & CHANG, T. J., 1955: Studies on the Life History of *Porphyra tenera* Kjellm. Scientia Sinica 4, p. 375. 殖田三郎, 1958: 増補海苔養殖読本. p. 192. 内海富士夫, 1936: 石灰物質に穿孔する藻類. 科学南洋. 5, p. 123.

欧 洲 を 巡 り て (I)

瀬 木 紀 男

T. SEGI: My visit to Europe (I)

筆者は欧洲各国に於ける藻類学関係の大学・研究所を歴訪し、主として *Polysiphonia*, *Gelidium*, *Porphyra* 等のタイプ及び重要標本の調査研究を行い、且つアイルランドの第3回国際海藻シンポジウムに出席するため、在外研究員として昨夏渡欧する機会を得た。近時航空機の著しい発達により割合短期間に11カ国を訪れ、多数の標本を精査・撮影し、又夏季休暇中にも拘らず多くの藻類学者と会見し、能率的な調査研究を行う事が出来た。以下藻類学関係に重点を置いて、順次その経過報告をする次第である。

(1) アイルランドへ

北極廻りの SAS 機で8月初め羽田をとび立ち、ベルリン、ロンドン經由まずダブリンに向つた。途中機上から朝靄のベールを透して見る遙かなるアラスカ大陸、壮大な北極・流氷群の景観、ベルリン、殊に東ベルリン地区

のバスによる廃墟見学等(第2次大戦の爆撃による)は生涯忘れ得ぬ印象を残した。8月12日午後、ダブリンからゴルウェイへの車中、早くもカナダのMACFARLENE 女史、ノールウェイのBAARDSETH 夫妻と同乗し、シンポジウムの話に花が咲きつつ夕方ゴルウェイに到着した。駅から大学のLEE 女史に迎えられてホテルに着き、その夜早速市主催のレセプションに臨んだ。長い間文通のみで知り合っていたフランスのFELDMANN 博士、スウェーデンのKYLIN 夫人、この国のDILLON 博士、ÓHEOCHA 氏他著名な海藻学者と初めて感激的な会見を行つたが、何しろ初対面の為、僅かに胸につけた小さな円い名札のみが唯一の頼りであつた。お互に固い握手を交し、長い間の友情を現実に温めた。各国人の間にカトリックの僧侶達が真紅のガウンをまとい入乱れている様は、一幅の美しい絵巻を見るようであつた。

学会の行われたゴルウェイは避暑地として知られる小綺麗な街で、美しいホテルが沢山並び、町の辻々には学会場への方向を示した瑠璃質の堅牢な標識が設けられ、又見知らぬ人も車に乗せてくれる等、町全体が我々を歓迎してくれるようであつた。会場のゴルウェイ大学はチュードル・ゴシック式の教会かお城を思わせるような石造の建物で、奇妙な屋根のドームが注目をひいた。たいして大きいものではなかつたが、カトリックの大学だけあつて壮嚴な宗教的雰囲気濃く、落ち着いた大学であつた。設備の点は電気も暗く、演題の表示板もなく(但し之は外国では普通のものである)、国際学会の会場としては少々貧弱であつたが、国及び大学当局の熱意が之を補つた。会場の一隅で Historical Exhibition, Trade Exhibition (別報参照)、映画会等が行われていた事は日本の学会と同じであつたが、各国様々な貨幣を交換する為、銀行が特設されている点は、如何にも国際学会らしかつた。学会は8月13日から19日迄、7日間に亘つて行われ、27カ国・約300人の海藻学者が集つた。13日午前9時半 LEMASS 通産大臣の挨拶、PRESTON 博士の海藻化学の特別講演によつて幕が落され、植物・化学・利用の各部門に分れて活潑な研究発表があり、小生も FELDMANN 博士座長の下に「日本のアオノリ」について講演した。日本



ゴルウェイ大学

で斯様に盛大に海藻を養殖し、食用とする事に先ず注目を浴びて多数の質問を受けた。又カラー・スライドで映写した日本独特の美しい海苔場風景、漁夫の服装等に目をみはつた。この日午後には DIXON (英), POWELL (英), HAXO (米) 氏の夫々 *Pterocladia*, *Fucus*, *Macrocystis* 等に関する講演があつた。又この夜政府主催の盛大なレセプションが行われ、この際ダルスがつまみに供せられた(別報参照)。14日は利用及び植物、15日は化学関係の熱心な研究発表が昼間続いた。一般に歐洲の研究は規模は左程大きくないが、その深奥さに感心した。14日夜はセント・パトリック小学校でワシントンの WALFORD 博士の “The sea as a potential source of food” と題する公開講演があり、パチスカーフより撮影された美しい海底生物の生態映画等が映写され、食糧源としての海の価値について種々の面から示唆を与え、特に日本の海藻利用に多大の関心を寄せた。15日夜には各部門別の晩餐会が行われたが、献立の最初に日本の密柑を使つたコクテルが出され、暫し故国の味を懐しんだ。



海藻採集会指導中の M. DE VALERA
女史 (Salthill 海岸にて)

この席上、海藻学者であり又首相令嬢である DE VALERA 女史の好意で、2人の美しい女流音楽家が招かれ、豎琴の伴奏で哀調にむせび泣くようなアイルランド歌曲を聞かせてくれ、一同更けゆく夜を惜しんだ。

快晴に恵まれた 16日はカローリエ、ドーレン両海岸に採集エクスカーションが行われた。バスで坦々たるアスファルトの道を西走する事1時間余この辺は一面の泥炭地で、その中の小さな沼辺で *Eiriciur* という植物を皆で採集する。之は北米に分布する植物で、歐洲では非常に珍しい。更にバスでカローリエ海岸に行き日本にない多くの海藻をも採集した。次に訪れたドーレン海岸はイシモが一面に分布し、この附近のセント・マックダラ小学校の壁は、すべて之で出来ていたのには驚いた(別報参照)。17日には遠く Aran Island と Milton Malbay への採集会も行われ、また 18日には Intertidal Ecology のシンポジウムがあつて BURROW 氏, CONWAY 氏, DE VALERA 女史, VIRVILLE 氏等の多数の研究発表があつた。

学会終了後、再びダブリンに戻り、Trinity College を訪れた。この大学は1591年創立の古い歴史と伝統を持ち、College green の東側に古色蒼然として横たわり、その Library は特に名高い。中庭中央にアーチ状のドームがあつて如何にも歐洲の大学らしい。更に奥へ進むと、つたのはつた二階建の植物学教室があり、此処に HARVEY の Herbarium を所蔵し、Australia の標本や、WRIGHT の採集した日本の標本もあつて興味深かつた。Type specimen としては *Polysiphonia* 9種 (内、日本にも産する種類は *P. forcipata* HARVEY, *P. concellata* HARVEY 等), *Dasya* 6種, *Polyzonia* 2種等がある。この WEBB 教授は相憎不在であつたが、助手の ROBERT 氏が既に手紙で依頼しておいた標本を、机上に並べて待つてくれたのには恐縮した。



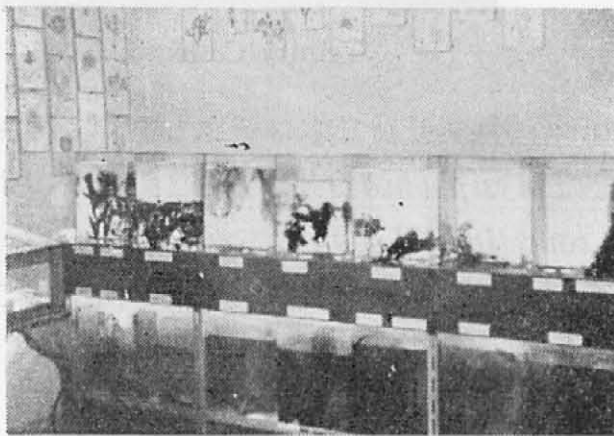
Trinity College

(2) アイルランドから再び英国へ

ダブリンから Aer Lingus 機でエジンバラに向う (濃霧の為グラスゴーに着陸し、バスで行く)。この町は古風な城下町で、中央にスコット・モニュメントの聳えたつプリンセス・ストリートは特に美しい。この通りの北側は近代的な商店、レストラン等がずらりと並ぶが、南側は堀 (美しい芝生と花壇になつている) を隔てて高台となり、中世的な古城や教会等が夢の如く浮んでいる。折からのエジンバラ祭でホテルの予約が困難を極めたが、植物園の HENDERSON 氏の好意でやつと古風なホテルの一室に落ち着いた。その翌日から Royal Botanic Garden の研究室に通い、GREVILLE Collection の多くの標本を検べた。*Polysiphonia* では *P. Brodiaei* (DILLWYN) GREVILLE の Isotype, *P. urceolata* (DILLWYN) GREVILLE の多くの forma, *Gelidium* の type 2種等もある。腊葉庫は英国産 (Ireland をも含む) のものと、他地方産のものとの大分類され、非常に整理が行届いている。各々一定の順序の下に整然と纏められ、type 及び重要標本は、上下に赤い線の入つた特別の type cover に入れられ、索引も行届き埃一つない。図書館も完備した立派なものであつた。藻類専攻学者は目下いないが、前記の HENDERSON 氏 (Cryptogams 専攻), GREEN 氏 (Phanerogams 専攻), PRENTICE 嬢が心から温く迎えてく

れた。建物はあまり新しくないがよく手入れされ、新鮮な気分になっている。この植物園関係者で祖国の為に出征し、戦死した人々の名が、入口正面の壁の大理石にメモリアルとして刻んであつたのも印象的であつた。HENDERSON 氏宅(前庭に桜あり)で一夕を過したが、彼は同じ専攻の日本の友と頻りに交際したがつていた。

エジンバラ滞在中、郊外の Inveresk にある海藻研究所を訪れたが、此処は丘の上の別荘を思わせる様な研究所であつた。所長 WOODWARD 博士はパリ

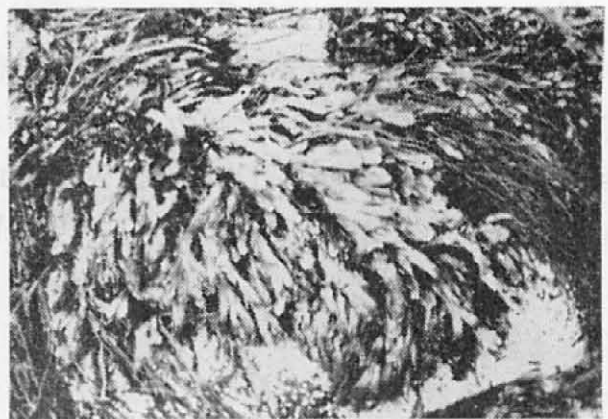


海藻研究所内の展示室
(Inveresk)

出発の為忙しく、海藻化学専攻の BOOTH 氏の案内で所内を見学したが、韓国留学生が1名いて、久しぶりに日本語で話した。現在この研究所は化学方面の研究に重点が移行し、門には“Authur D. LITTLE Research Institute”と“Institute of Seaweed Research”の2つの看板が掲げてあつた。入口のゲスト

ブックにサインをした時、山田・高橋両先生のサインがあつて非常に嬉しかつた。展示室には腊葉の他、生の海藻が大きなガラス・バットに入れられ、自然の生態を見せる努力が払われていた。スイッチを入れるとバットの下から照明され、*Enteromorpha intestinalis*, *Harydrys siliquosa*, *Ascophyllum nodosum*, *Fucus vesiculosus*, *Rhodomenia palmata*, *Porphyra umbilicalis* 等18種が浮き出した様にみえた。

又褐藻類の利用についての展示箱や、アルギン酸を利用した種々の商品の展示等もあつた。午後採集の為 BOOTH 氏が雨中をも厭わず North Berwick 海岸に案内してくれた。沿道の Aberlandy 海岸には延々としてコンクリート・ブロックが一行に多数並び奇異の感を抱かせたが、之は tank traps と称

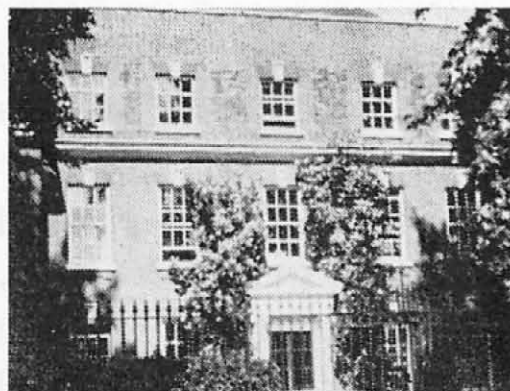


Fucus, *Himanthalia* の群落
(North Berwick 海岸にて)

し、大戦中独軍のタンク上陸を防ぐ為備えたものだという。目的地に着くと幸にも雨はあがり、この辺一帯の海岸には *Fucus, Himanthalia* の群落が続き壮観であつた。又向い側の Bass Rock 島には Gannet と称する鳥が多く棲息し、その為鳥が白く見える程であつた。

思い出多き古都エジンバラを後にして、BEA 機で再びロンドンに向つた。ロンドンの街は黒くくすんだ古めかしい建物がずらりと立並び、如何にも日の没する事なき老大国の首都らしかつた、此処には有名な Museum が余りにも多

い。藻類学関係としては Kew Gardens の Herbarium と British Museum を訪れた。Kew の大研究室は中央部は上迄通しの広いホールになつており、各階とも窓側がコンパートになり、其処に腊葉庫と研究机が並び、隅の方の2つの螺旋



Kew gardens の Herbarium
(London)

階段が各階を連結している。此処には、日本近海にも産する *Polysiphonia abscissa* HOOKER et HARVEY の type specimen がある。又 DAWSON TURNER の古い標本が Herb. HOOKER として良く保存され、本邦及び近海産のもので type specimen となつている *Sargassum* の重要標本 (*S. enerve* C. Ag., *S. Horneri* C. Ag., *S. patens* C. Ag. 等) がある。この他 *Gelidium* の標本も多いが、就中 TURNER 著 *Fuci* (1819) の原本を検べ、この中の *Fucus corneus* (= *Gelidium corneum*) の図版代りに Original specimen を見ることが出来たのは望外の喜びであつた。此処では、折悪しく土曜の休日にかかつたが、DICKINSON 嬢の好意でこの日も研究を許された。すぐ前の植物園は手入がよく行届いて清潔を極め、塵一つ落ちていない点は国民の高い公德心を物語るものであろう。一方 British Museum は市内2カ所に分れ、海藻は Cromwell Road にある Natural History の部にある。この建物は第二次大戦で爆撃を受けたが、現在すっかり復興してゴシック式の尖塔が高く聳え、壮大なものであつた。此処の6階には海老茶色の腊葉庫が一斉に並び、多くの *Polysiphonia, Gelidium* の標本を蔵し如何にも英国らしい底力を見せていた。海藻関係の CHAMBERLAIN 嬢は結婚して BUTLER 女史となり、ゴルウェイで既に顔馴染の間柄であつたので心易く種々の便宜を与えてくれた。(続く)

(三重県立大学水産学部)